

ムカシの競馬を読む

平成17年・京都競馬場
京都金杯
優勝馬：ハットトリック

© JRA



第114回 10年・20年・30年前の1月



今から10年前、平成17年の1月
というと、東の金杯をクラフトワーカー
が、西の金杯をハットトリックが
制した月。西はサンデーサイレンス
産駒の1～3着独占、一方東はサンデーサイレンス系の出走馬が1
頭も無しという対照的な結果にな
っていた。

この平成17年は、当時父内国産
馬限定重賞だった中日新聞杯以外
の重賞レースが混合競走となる
り、クラシックレースのマル外出走
枠も4頭に拡大された年。開放路
線が着実に進みつつあった。細かい
ところでは、前年まで8頭立て以下
は「枠連のみ・馬連なし」だったの
が、「枠連なし・馬連のみ」となって
いる。

また、それまで学生・生徒・未成
年者は勝馬投票券を購入できな
いとなっていたものが未成年者だけ
となり、「20歳以上の大学生」は大
手を振つて馬券を買えるようになっ
たのがこの年である。

ナル手前、2番人気のトウショウウエノマが集団から徐々に遅れだした。田中勝春騎手が脚元をのぞき込むようにして減速。残り800メートル地点では完全に競走を中心してしまった(中略)馬運車で厩舎に戻つたトウショウウエノマは、たちに診療所スタッフによる馬体検査を行つた結果、寛ハ行という症状だけが発表された」

寛ハ行や肩ハ行は程度にかなり幅があり、「おかしいような気がするけど原因が分からぬ」というときにも付けられる診断。実際この時のトウショウウエノマは最終的に異常が見られず、レースで止めたことについて賛否両論が激しくぶつかり合うこととなつた。当時の関東法人は「記憶だらう。

結果論ではなんでも言えるが、馬が元気であることがなにより。しそうちゅう起つては困るが、乗つている騎手の判断は尊重したほうが多い。馬券はそれで損をする人もいれば得をする人もいる、というのが筆者個人の見解である。

続いて12日付の中日スポーツから。

と切り捨て、私鉄並みに駅ビル、ホテル、販売・飲食店の直営や年間2000戸のマンション分譲計画などを明らかにした。さらに「コーネーメディア時代にふさわしく、みどりの窓口のコンピューター網を利用して馬券の販売も検討と、膨大な赤字に悩む国鉄さん、なりふり構わぬ状態だ」

さらに記事では「国鉄は全国に切符販売用のオンラインを持つている。これを中央競馬会のコンピューターとドッキングさせれば、各駅のみどりの窓口で馬券を販売することも可能なのだ」とし、国鉄幹部の談話も紹介している。

これは決してスピードの飛ばない記事ではなく、同日付の報知新聞や日刊スポーツも「国鉄が馬券販売」という記事を載せており、国鉄側からそういう内容の発信は実際にあつたのだ。

残念ながらこの計画は実現するに至らず、そういうするうちにパソコン通信を経てインターネットの時代となり、JRとJRAが組む意味も無くなってしまった。それでも、仮にこの計画が実現していたら、その後の馬券界はどうなっていたらうか……などと妄想してみるとなかなか面白い。ちなみにJR職員には競馬ファンがかなりの数存在す

「国鉄がなんと馬券発売に乗り出しました! 国鉄は10日、62年民営化を骨子とした独自の自主再建計画を発表し、赤字コマカラ爆線と、ボンサリーハマテツソとともにサンパウロ大賞に遠征し、そのまま現地に残った中神騎手が帰国したのが今からちょうど20年前のこと。この記事でも「蒸発同然」と書かれていたり、よく「失踪」とされる同騎手のブラジル残留だが、実は一度空港で見つかったり、現地で説得を受けたりなど、複雑な段階を踏んでいる。また、その経緯は当時の「優駿」でも報じられている。

感想としてちよと角度がズレているかもしれないが、ブラジルに残ったという話がすごい以前に、ブラジルに人馬が遠征していたという話がすごいような気がする。輸送技術が進んだ現在でも、アメリカ東海岸への輸送は躊躇してしまうところ。それが南米となつたら、いくら条件が良くても、そうそう行く人馬は現れないだろう。昔の日本競馬関係者は意欲旺盛だったのだ。

最後にいまから30年前、昭和60年1月の紙面から、11日付のスポーツを引用しよう。

と切り捨て、私鉄並みに駅ビル本館2000戸のマンション分譲計画などを明らかにした。さらに「ヨーメテル、販売・飲食店の直営や年間窓口のコンピューター網を利用して馬券の販売も検討と、膨大な赤字に悩む国鉄さん、なりふり構わぬ状態だ」

さらに記事では「国鉄は全国に切符販売用のオンラインを持つている。これを中央競馬会のコンピューターとドッキングさせれば、各駅のみどりの窓口で馬券を販売することも可能なのだ」とし、国鉄幹部の談話も紹介している。

これは決してスポーツの飛ばし記事ではなく、同日付の報知新聞や日刊スポーツも「国鉄が馬券販売」という記事を載せている。つまり、国鉄側からそういう内容の発信は実際についたのだ。

残念ながらこの計画は実現するに至らず、そういうするうちにパソコン通信を経てインターネットの時代となり、JRとJRAが組む意味も無くなってしまった。それでも、仮にこの計画が実現していたら、その後の馬券界はどうなっていたろうか……などと妄想してみるとものなかなか面白い。ちなみにJR職員には競馬ファンがかなりの数存在す

競馬を取り巻く環境としては、地方競馬の衰退が著しい時期だつた。前年末まで高崎競馬が廃止となり、この年の3月まで宇都宮競馬も廃止が決定済み。さらに他の場に波及する可能性も囁かれていった。一例として、平成17年1月20日付のスポーツニチから引用しよう。

「経営不振に陥っている笠松競馬（岐阜県笠松町）の存続を検討する岐阜県の有識者委員会が19日に県庁で開かれ、経営参入を表明しているインターネット関連会社ライブドア（東京）について『同社が参入しても存続できない』との結論を出した。県と笠松、岐南両町が来週にも存続の是非を協議する見通し。三者とも事業を続けて赤字が発生しても税金投入しない考え方で一致しており、ライブドア以外から赤字補てんを含めた新たな提案がなければ、同競馬の存続は厳しい状況となつた」

瀬戸際まで追い込まれた。實際にはその後荒尾と福山が廃止となるが、残った場はIPAT効果もあって昨年以降は人々に良いムードになっている。笠松をはじめ、石にかじりついて存続してきた競馬の関係者が良い思いをするよう、今後のさらなる経営好転を祈るばかりだ。

続いて2年前、平成7年の1月。この月は17日に阪神淡路大震災が起き、JRAも阪神競馬場が大きな被害を受けてその後の開催日程に影響が及んだ。その一方でJRAはいち早く義捐金を拠出し、阪神の厩舎に付随する宿舎を被災住宅として提供するなど復興にも尽力している。

震災が起きる前の出来事を拾ってみよう。冒頭にも書いたように1月といえば金杯だが、サクラローレルが勝ったこの年の中山金杯は2着に13番人気ゴールデンアイが入ってヒモ荒れの馬連万馬券とな

た。このゴールデンアイは人気薄も当然。こんな背景で出走していた馬だった。6日付の日刊スポーツから引用しよう。

「2着で波乱の舞台を演出したゴールデンアイは前日(4日)まで乗組り役が決まらなかつた。重賞レースでは珍しいことで、こんな背景も人気を落とした原因かもしね。急きよ依頼された田中剛騎手しても騎乗は初めてで、関係者から馬の特徴などを簡単に聞いてレースに騎乗するという、まさに綱渡り」

本来この馬の主戦だった的場均騎手は3番人気のナカミアンデスマニに乗っていたが、こちらは11着と大敗しているのだから競馬は難しいものである。

数日後の中山では、こんな出来事があった。記憶の方も多いに違いない。まずは9日付の日刊スポーツから引用しよう。

「場内から悲鳴にも似たどよめきが沸き上がる。勝負どころの3コーナー

ムカシの競馬を読む



須田鷹雄 すだかおう
1970年東京生まれ。競馬ライター。サラブレーダー。
大坂日刊スポーツなど各種媒体に寄稿中。